The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カント哲学の思惟構造 : 理性批判と批判理性
Author(s)	山本, 博史
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/44499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【45】

氏　　名	山本博史（やまもと ひろし）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１７４４１　号
学位授与年月日	平成 15 年２月 18 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**カント哲学の思惟構造－理性批判と批判理性－**
論文審査委員	（主査） 教　授　里見　軍之 （副査） 教　授　溝口　宏平　　助教授　入江　幸男

論文内容の要旨

カントの理性批判は理性の自己批判という性格をもつが、本論文は、感性、悟性、理性（狭義）などの各ステージで理性の自己批判がどのように貫徹されているかを詳細に明らかにしている。さらに、批判理性自身の根拠が、個人的なものであると同時に個人を越えたものでもあるインテリゲンツにあること、そしてこのインテリゲンツは知性であると同時にその裏面のアロゴスに支えられているものであることを主張するものである。

「第一章　越論的感性論と批判理性」においては、時間と空間との夫々の優位が実は超越論的統覚の内へ向かう自覚と外へ向かう自覚とにあることと、この優位性という事態は批判理性の直覚的定立に基づくことが述べられる。「第二章　理性批判と批判理性」では、多義的な「自我」概念と「物」概念を精緻に分析しつつ、批判する理性と批判される理性とが同一のものであるという、インテリゲンツ（哲学的理性）の自覚の成立によって理性の自己認識が完成すること、さらに、このインテリゲンツが個人的なものであると同時に個人を超えたものであることが証される。「第三章　超越論的弁証論とインテリゲンツ」においては、必然的に二律背反に陥る超越論的推論は認識を断念し、実践へと決断せざるをえないのだが、この移行の根拠もインテリゲンツであるという哲学的理性の自覚のうちにあること、そしてインテリゲンツであることの内実は理論理性の領域では空虚でしかないが、実践理性の領域ではじめて豊かな意味をもちうることが示される。「第四章　理性の事実とインテリゲンツ」では、「理性の事実」と称される道徳法則の根拠がインテリゲンツにあること、そして、このインテリゲンツは理論理性の領域においても通底しているものであることが論じられる。「第五章　自律と自己認識」においては、哲学的理性が実践的原理と個別的行為との包摂関係に関する反省を通じて、道徳法則を措定する自らの意志が善意志であることを自覚するに至ること、また感性界から叡智界への移行の根拠がインテリゲンツであることの意識であること、そしてまさにこのことがカント哲学のドグマ性を証していることが指摘される。「第六章　純粋実践的判断力の範型論の意義」では、範型論を理論哲学における図式論と比較しつつ、それが理論哲学と実践哲学とを架橋する根拠を含むこと、実践哲学と歴史哲学や教育哲学との有機的連関を準備するものであることが述べられる。「第七章　実践的反省と感性」においては、「謙抑の感情」と「尊敬の感情」とは哲学的理性が感性の側を注視するか実践理性の側を注視するかの違いでしかないこと、尊敬の感情は人格的意識の直接的具体的表現であること、さらに、カント倫理学の根底にある理性に対するオプティミズムはまさにそのドグマ性を示していることが指摘される。「第八章　純粋実践理性の弁証論の論理構造」では、純粋実践理性の弁証が、理論理性の弁証と比較されつつ、超越論的仮言推論に基づく無制約者と制約者との直接的綜合でありかつ二律背反に陥ること、その推論は大前提において生じることが明らかにされる。さらに哲学的批判理性がインテ

リゲンツであることの絶対的信が、実在的廃棄としての「要請」論の根拠であり、理性宗教の根拠であることが論じられる。

論文審査の結果の要旨

カントの批判哲学は「批判」の語源通り「分かつ」ことを特徴とする。感性と悟性、悟性と理性、有限と無限、理論と実践などを分かち、夫々の概念に所を得しめることによって厳密な理論構成を果たしている。本論文はこうした「批判」をもちろん踏まえつつも、それだけにとどまらず、批判理性の根底にインテリゲンツなるものが通底しており、分かたれた各要素はこのインテリゲンツの表現であること、インテリゲンツは各要素、各ステージにおいて働きつつ自覚を深めていくものであることを明らかにしており、カント哲学が通常解釈されているよりも遥かにダイナミックな構造を有していることを示した。さらに、このインテリゲンツという概念が、カントの場合にとどまらず、近代哲学のもつロゴス性という特徴を実は裏で密かに支えているアロゴスの根拠でもあることを見事に抉り出している。また、カントの理論哲学において提示された4綱12目のカテゴリーが実践哲学においてどのような役割をはたすのかをカント自身は整合的に語っていないし、ベックなど著名な研究者も十分には分析できていないのだが、本論文がこれを見事に論じ切っていることは特筆すべき業績である。

ところで、カントは道徳法則を「理性の事実」として提示し、最終的にはこれの根拠付けのために実践理性を超えた宗教的なもの（アロゴス）を「要請」したのであり、筆者はここに人間という有限的理性的存在者とこれを超えた無限的理性的存在者との単なる分離ではなく、「分かつ」という批判哲学のもうひとつの隠れた特性である両者の「相属性」を強く主張している。しかしながら、筆者がこの「要請」を「カントの批判哲学のドグマ性」と呼んで否定的に評価しているのは、有限と無限との「相属性」という筆者の強い主張とは必ずしも整合的でない。この「ドグマ性」があるからこそ、カントにおける両概念の「相属性」を語りうるはずだからである。また、カントにおけるアロゴスとして読み取っているものが真にアロゴスと言えるのか否かも問題であろう。筆者はアロゴスを十分見て取っていないとしてハイデガーを批判しているが、むしろハイデガーから見ればカントの場合にアロゴスに当たるものはロゴスの一変種に過ぎないということになるのではないか。本論文に対してこのような疑問が残るのではあるが、しかし、上記のように、本論文が独創的なカント解釈を提示していることには疑いの余地がない。よって、本論文を博士（文学）に相応しいものと認定する。